

名軍師 黒田官兵衛 その六

講談師 一龍斎貞花

過日、福岡県直方市^{のおがた}で、「黒田官兵衛」と「母里太兵衛」を口演。この直方は、太兵衛が筑前六端城の一つ鷹取城一万八千石を拝領したところ。一般には母里^{もりの}もりだが直方では、ぼり^{ぼりの}太兵衛という。城址や屋敷跡があり、城下町に由来する鉄砲町、桜の馬場などの地名が残っている。栗山善助と共に、官兵衛を土牢から救出した豪傑で、福島正則から名槍日本号を呑み獲ったというおなじみ「黒田節」の主人公。博多駅前には、大盃を手にした太兵衛の銅像、博多人形と同じ姿、福岡城址に太兵衛の長屋門が残されている。福岡では、もり^{もりの}、どっちが正しいかは判らないが、こうしたことは応々にありま

す。講釈師にとつては、語のまぐらで直方の話が出来るわけで、ご存知ない講談ファンも多いし、講釈師見てきたような嘘でなく、こうした出会いはたまりません。歴史好きの方も同じと思います。歴史とのふれあい、旅の楽しさです。

豪胆な軍師・官兵衛

豊臣秀吉の天下平定最後の敵は、小田原の北条氏政。大軍をもって小田原城を包囲。一気に攻めず陣屋の周囲に菜園のほか、町人が全国の産物を売買、遊女宿まであり、傷病兵や将兵の保養地が底倉の湯、現在の箱根温泉郷へ発展。

正に熟柿の落ちるを待つ長期戦だが、小田原評定に業を煮やして攻めた時、乱戦の中、官兵衛は丸腰のまま城門の前に立ち、城主氏政に面会を申し入れる豪胆さ。氏政を説得し、氏政を自害させ、家来の命を助け、後に氏康から官兵衛にお礼の品が送られます。

官兵衛は、軍師としての戦略のみならず平然と一人で敵陣へ乗り込んで相手を説得。和議を結ぶ時には、高級魚のホウボウの煮付けを相手に贈り、心和ませ和議に及ばせたと申します。高松城水攻めの時、清水宗治切腹の前、奮戦をねぎらい酒肴を贈っています。

また寝返えらせたりする謀略にも

長け、家来を失わず戦費も少なくてすむ、戦わずして勝つ孫子の兵法。半兵衛亡きあと秀吉を支え天下取りを実現させました。

後年聚楽第^{じゅらくだい}で、秀吉が座興に近習たちに、
「我亡きあと、誰れが天下を取ると思う」

皆口々に、徳川家康殿、前田利家殿、蒲生氏郷殿と。
「イヤ違う、何かあったら横合いからスイッと天下を横取りするのは、官兵衛お前よな」

言われた時に、「主人は、わしをそんな風に見ているのか、これはいかん」と、四十四歳の若さで家督を

倅長政に譲り、隠居すれば普通は国元へ帰るのだが、「我が心水の如し」如水と名乗り、これまで同様秀吉に仕えます。主人の気持ちを読み取って、身を守り家の安泰を図ったのです。

官兵衛の心を見抜いてか秀吉は、家康と戦った小牧長久手の戦いの後、播州六粟郡四万石。九州征伐に功をたてた天正十五年、ようやく豊前中津十二万石を与えた。

文武両道茶道に通じ、連歌を得意にし、度々連歌師を招き、大名の間に連歌が盛んとあつて、息のかかった連歌師を送り込み情報を得る。儉約家、けちともいわれたが、無用な出費をさげ、暮しに困っている者に惜しむことなく金銀を与え、ぜいたくをせず蓄えた金で武具を整え出陣に備えました。

秀吉亡き後、家康につき関ヶ原合戦の時、長政が兵を率いて出陣していて手薄、蓄えた金で浪人、農民をかき集め九千の兵を率いて西軍に味方する城を次々と攻略。ところが、関ヶ原の大戦が一日で決着、小早川

秀秋を裏切らせるなど、長政の働きが大きかった。

長政が「家康殿が、手を握ってお礼を申されました」

「家康が握った手は右手か左手か」「右手でした」

「お前の左手はなにをしていたのか」なぜ左手で家康を刺さなかったのかと。

「大戦が長びけば九州を制圧し、兵を率いて攻め上り天下を取るつもりであつたのに、わずか一日で、それも倅の働きで終つたとは」

長政は、この功により五十二万石の大身となるも、如水にとっては不満でしかなかった。家康から「九州の西軍を滅ぼした功により、望みの領地を遣わす」といわれるも、「茶壺一つで結構でござる」と、以後一切表舞台には出ませんでした。

出身地の地名から福岡としたが、駅名、地名に栄えた博多の名が残されていきます。

「おもひおく言の葉なくてつひにゆく 道はまよはじなるにまかせて」の辞世を残し、慶長九年

(一六〇四年)三月二十日にこの世を去りました、享年五十九歳。

戒名、龍光院殿如水円清大居士

遺言により、信長の法要が営まれた京都大徳寺に葬られ、長政が父の菩提寺として龍光院(塔頭)を造営、開山の江月宗玩は、後に直方初代東蓮寺藩主黒田高政が、父長政の菩提を弔うために建立した雲心寺の開山として迎えられている。

後に、黒田家の墓所となる長政が創建した博多の崇福寺に分骨。

一年に及ぶ幽閉にも耐えた強靱な精神力、半身不随になりながら戦場を駆け巡り、秀吉を天下人にと押し上げ

た名軍師黒田官兵衛。その語録は、経営の参考になる教え沢山あり、次回ご紹介ご期待下さい。



写真は 大徳寺 龍光院山門